



人間発達環境学の発展に向けて

浅野, 慎一
森岡, 正芳
津田, 英二

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(2):177-189

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006279>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006279>



人間発達環境学の発展に向けて

Looking for the Development of Study on Human Development and Environment

浅野 慎一* 森岡 正芳** 津田 英二***
Shinichi ASANO*, Masayoshi Moroika**, Eiji Tsuda***

要約：本報告は、人間発達環境学の一層の発展に向けた一つの論争である。著者の一人である浅野は、2013年度前期のゼミナールにおいて、発達科学・人間発達環境学を正面から論じた11本の論文を批判的に検討した。その検討結果をまとめたものが、本報告の第1章『人間発達学の発展に向けた覚書』である。浅野は、この覚書を、検討対象とした論文の著者のうち、人間発達環境学研究科に在籍する方々に送付し、可能であればリプライをいただけるようお願いした。そして森岡・津田が、これに応じた。それが、本報告の第2章「発達科学と物語——浅野論文：『人間発達学の発展に向けた覚書』に就いて」、第3章「浅野論文へのリプライ」である。論争点は、科学と物語、理論と実践、近代と脱近代、自然と社会、文系と理系、発達と環境、本質と構築、個人と社会、そしてこのようなさまざまな二元的認識それ自体の意義と限界等、多岐にわたる。これらはいずれも、人間発達環境学を発展させるために十分とはいえなくとも、必要不可欠な論点ではあろう。本報告が、人間発達環境学・発達科学のさらなる発展に向けた議論の活性化の一助となれば幸いである。

序 本報告の成り立ち

本報告の成り立ちを正しく述べるには、芥川龍之介の「藪の中」、黒澤明の「羅生門」、そして人類学者ルイス (Lewis, O.) の「羅生門式調査法」に倣い、執筆者・関係者全員が本報告に対するそれぞれの独自の立ち位置・思い・批判を語り、それらを交織させて一つの物語として描き出す手法が必要になるだろう。本報告の執筆者・関係者は、おそらく人間発達環境学を発展させたいという願いを共有しているとはいえ、本報告に対する立場はあまりにも多様であるからだ。

しかし一方、そのような多様性の認識は、本報告の成り立ちの説明だけに求められるものではない。何よりも本報告そのものが、そのような多様な立ち位置・思い・批判の交織として成り立っている。

そこでここでは、数ある入り口の一つとして、あくまで著者の一人である浅野の立ち位置から、本報告の成り立ちについて簡単に述べることにしたい。

浅野は、2013年度前期のゼミナールにおいて、発達科学・人間発達環境学を正面から論じた11本の論文を批判的に検討した。

その検討結果をまとめたものが、本報告の第1章『人間発達学の発展に向けた覚書』である。

浅野はこの覚書を、同年7月、検討対象とした論文の著者のうち、人間発達環境学研究科に在籍する方々に送付し、もし可能であればリプライをいただけるようお願いした。これは、浅野によるまったく一方的なお願いであった。そして森岡氏・津田氏からリプライの原稿をいただいた。それが、本報告の第2章「発達科学と物語——浅野論文：『人間発達学の発展に向けた覚書』に就いて」、第3章「浅野論文へのリプライ」である。森岡氏・津田氏以外の方々からは、応答の意思をもちつつも、他のお仕事との兼ね合いでどうしても執筆が難しい旨の丁寧なお返事をいただいた。ここに改めて、浅野の勝手に一方的な依頼にもかかわらず、それを受け止めてくださった森岡氏・津田氏はじめ本研究科に在籍するメンバーの方々に、お詫びと御礼を申し上げる。

本報告が、人間発達環境学・発達科学のさらなる発展に向けた議論の活性化の一助となれば幸いである。

なお書式等に統一を図ることも検討したが、むしろそれぞれの独自のスタイルの原稿をあえてそのまま掲載の方がよいと最終的に判断した。修正は、章・節の様式など最小限にとどめた。

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

*** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2013年10月1日 受付)
(2013年11月1日 受理)

第1章 「人間発達の学」の発展に向けた覚書

浅野慎一

I. はじめに

神戸大学発達科学部は、創立20周年を迎えた。同大学院人間発達環境学研究科も、創立から5年を経た。発達科学・人間発達環境学の到達点は、すでに多くの著作物・シンポジウム・プロジェクト研究、および日々の教育によって提示されている。またそれは、日々発展の途上にある。

筆者は、発達科学・人間発達環境学の一層の発展を目指し、微力ながら「人間発達の学」の構築を模索してきた。そして本年度前期のゼミナール（大学院・学部）で、人間発達を正面から論じた諸論文を取り上げて検討した。対象とした論文は、計16本である。うち5本は拙著で、これらは、筆者の現時点での到達点であり、他の文献を検討する立脚点でもある。それ以外に、森岡正芳、津田英二、山本敏郎、渡部昭男、氏家達夫、遠藤利彦、二宮厚美、太田和宏、蛭名邦禎の各氏の論文、計11本を取り上げさせていただいた。

本章は、このゼミナールの報告であり、「人間発達の学」の発展に向けた先行研究批判の覚書である。

検討対象とする論文の選定には、いくつかの限界・制約があった。まず第1に、人間発達に関わる多様な学問諸領域を十分に網羅的にサーベイできたとはいえず、必読文献が欠落している可能性がある。第2に、ゼミナールという教育の場での検討であるため、比較的短い論文に限定せざるを得なかった。そして第3に、一部を除き、2005年以降に発表された比較的新しい論文を優先した。2005年時点で筆者が一応の先行研究の検討を行い、その結果を発表していたからである⁽¹⁾。

また検討対象とした論文は、既存の学問分野で分類すれば、臨床心理学、発達心理学、教育学、開発学、経済学等、多岐にわたる。そして、筆者はそのいずれの分野の専門家でもない。筆者は対象論文を、あくまで人間発達を正面から論じた文献として検討した。各専門分野での個別の論点に関し、本章が多くの誤解・認識不足を含んでいることはおそらくまちがいない。

その意味で本章は、先行研究批判として、暫定的な覚書にすぎない。それをあえて公表する理由は、人間発達環境学・発達科学の一層の発展に向けた議論の素材として、広く批判に晒したいからである。

II. 「人間発達の学」の概要

まず、筆者が模索してきた「人間発達の学」の到達点を、概括しておこう。詳細は、拙著（1998）・（2005a）・（2005b）・（2005c）・（2006a）を参照されたい。

【人間発達とは何か】

人間発達とは、疎外とその克服の過程である。したがってそれは、人間の生命性・意識性・社会性の統一的・主体的実現である。またそれは、①諸個人の人生、②歴史社会的主体形成、③人類進化という3つの時空の統一として展開する。人間発達は、人間の「生命-生活（life）」が存在する限り継続する。つまり人間発達のゴールは、個人の死、および人類の絶滅またはポスト人類への

進化である。

【「人間発達の学」とは何か】

人間発達を把握するには、近代諸科学を根底的に批判し、新たなオルタナティブ・ディシプリンを構築する必要がある。すなわちまず、細分化・専門分化した近代諸科学を克服し、統一的パースペクティブを確保しなければならない。また宿命論・解釈論としての近代諸科学を克服し、主体論・変革論を内包した理論構築が不可欠になる。人間発達の学は、既存の近代諸科学のディシプリンを前提とした学際研究ではない。

【人間発達の現局面（歴史認識）】

人間発達における現在の歴史局面は、近代とその止場にある。現在の主要な疎外形態である近代とは、資本蓄積を至上目的とし、資本主義・国民国家・市民社会を不可欠の構成要素とする世界規模の社会である。近代的疎外の最終的根拠は、能力主義と国民主義にある。もちろん近代社会は人間の疎外の原因ではなく、結果である。

【「人間発達の学」の暫定的方法論】

現在の人間発達を捉える有効な方法論の一つとして、生活過程分析に基づく社会変動論がある。これは、諸個人の「生命-生活」とその発展的再生産過程をトータルに、しかも社会構造変動と結びつけて捉える方法である。また、主観と客観、自然と社会、個人と社会、普遍主義と多元主義、本質主義と構築主義、遺伝と環境、物質と精神、属性と業績といった、あらゆる近代的な二元論・二者択一を批判し、現実の統一と変化を弁証法的に把握する。

以下、こうした知見を立脚点として、諸文献を検討する。行論中、論点を鮮明にしようとするあまり、礼を失することがあるかも知れないが、御容赦賜りたい。

III. 因果関係の認識とナラティブ・アプローチ

まず森岡（2013）である。本論文は、人間発達環境学研究科のプロジェクト研究の成果であり、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』（20周年特別号）に特別寄稿された。

【自然性と意識性を置き忘れた社会性】

森岡論文は、現在の発達研究の方法論上の一つの問題が、「因果関係を読み取ってしまう認識の枠組み」⁽²⁾にあると述べ、これに對置してストーリーまたはナラティブ研究の重要性を強調する。それは、専門家の理論・科学とは異なり、「異質な、あるいは矛盾するような要因も含めてつなぐことのできる枠組み」⁽³⁾である。また、「対象を何かと特定し分類する知」ではなく、「いっしょに探る知」でもある⁽⁴⁾。森岡氏は、ブルーナーが提起する人間科学の2つのモードを援用し、一般的な法則性・因果関係を把握する「論理実証モード」とは異なる「ナラティブ・モード」の研究の意義を強調している⁽⁵⁾。

さて筆者は、こうした森岡氏の主張が、一定の角度から人間の主体的創発性を捉えようとする理論枠であると考えられる。しかし人間発達を捉える理論枠としては、やや疑問を感じる。なぜなら、

「因果関係の認識（意識性）」は人間の重要な主体的本質の一つだ。また、対象者の「語り（言語）」や支援者との関係性に視野を限定せず、対象者のトータルな「生命－生活」過程の把握こそが重要ではないだろうか。たとえば、極度の身体的苦痛や生命の危機に瀕した対象者にとって、本当に必要なことは、「語り」やその解釈ではなく、フィジカルな「生命－生活」の維持・発展的再生産であろう。また対象者の主体性やその発達の最大の産物・成果も、「語り」ではなく、対象者自身のトータルな「生命－生活」であろう。臨床心理領域における諸問題も、そうしたトータルな「生命－生活」の発展的再生産過程における疎外の一環と位置づける必要があるのではなかろうか。

人間の「生命性（自然性）」を視野の外におき、「意識性（因果関係の認識）」を批判し、「社会性（関係性）」に展望を見出そうとする立場は、社会学におけるハーバーマスのそれに近いように思われる。ハーバーマスは「道具的理性（因果関係の認識）」がもたらす弊害を、「コミュニケーション的理性（関係性）」によって克服しようとした。しかし実際には、人間のコミュニケーション的理性は、道具的理性と同様、疎外されている。非現実的な理想的発話状態を想定しない限り、コミュニケーションによって問題は解決しない。「論理実証モード」と同様、「ナラティブ・モード」もまた疎外を免れないのである。総じて2つのモードの二者択一、またはその相互補完的接合といった認知枠は、生命性・意識性・社会性の不可分の統一としての人間の問題解決において、限界を免れ得ないのではない。

【近代批判か、近代主義か】

森岡氏が「論理実証モード」と「ナラティブ・モード」の差異を重視する背景には、前者が近代主義であり、後者は近代批判の要素を含むといった認知枠があるように思われる。たとえば氏は、心理臨床専門家のメタ理論に対するガーゲンの批判を紹介している⁽⁶⁾。ガーゲンは、メンタルヘルスの専門職の大部分が「近代の産物」であり、その拠って立つメタ理論が、①病理の背後にはその原因または基礎となるものがある、②クライアントかその人間関係に原因がある、③問題を診断できる手段が存在する、④問題を除去できる手段が存在するというものであると述べる。

しかし筆者は、ガーゲンに同意できない。現在のメンタルヘルスの専門職の大部分が「近代の産物」であることは自明だが、ここであげられた4つのメタ理論の多くは、必ずしも近代に限定されない人間の普遍的・通歴史的な認知枠（意識性）に由来する。もとより近代の枠内で、必ず原因・基礎が解明でき、診断・除去できる手段があるといった科学万能主義は、「近代の産物」だ。しかし、因果関係の認識に基づいて目的意識的に問題を解決しようとする行為自体は、人間が本源的にもつ類の本質である。つまり「論理実証モード」が近代主義であるとは限らないのである。

前述のハーバーマスは、「道具的理性（因果関係認識）」と「コミュニケーション的理性」を、ともに近代的理性と位置づけた。彼の認識は一面の妥当性をもつ。つまり、もし「論理実証モード」が近代主義であるなら、それを批判する「ナラティブ・モード」ももう一つの近代主義にはかならない。ガーゲンのようにメンタルヘルスの専門職がもつメタ理論を近代主義であるとみなし、その

相対化を主張するのであれば、当然、近代の克服を正面から問わねばなるまい。しかしメンタルヘルスはあくまで近代的な対人援助であり、その枠内での有効性こそが問われるのではない。

IV. 近代と脱近代／理論と実践

さて次に、津田（2012a）・同（2012b）、山本（2001）、および渡部（2013）を検討する。渡部論文は、前掲の森岡論文と同様、人間発達環境学研究科のプロジェクト研究の成果であり、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』（20周年特別号）に特別寄稿された。

【ナラティブ・物語への回収：近代的二元論】

まず津田氏は、近代主義的発達概念を批判し、新たな発達概念を提起する。すなわち「システムの中で意味づけられた発達（近代）」ではなく、「生活世界において固有に意味づけられた発達（大きな物語からの脱却）」である。また「個人の発達（近代）」ではなく、「関係発達論」である。それにふさわしい説明方法は、「科学的説明（近代）」ではなく、「物語的説明」である。あるいは障害の把握においては「個人モデル（近代）」ではなく、「社会モデル」である⁽⁷⁾。こうした認知枠は、津田（2012b）の図に総括的に示されている⁽⁸⁾。

こうした津田氏の議論には、前掲の森岡氏のそれと似通った、二者択一の発想が見て取れる。筆者の見解によれば、「システム→生活世界」、「個人→関係」、「科学→物語」等のシフトは、何ら現実の問題を解決しない。

たとえば津田氏は、障害に関する「個人・医療モデル」から「社会モデル」へのシフトの例として、個人因子にとどまらず、環境因子が重視される方向にシフトしてきた事実をあげている⁽⁹⁾。しかし、「個人」と「環境」は対概念とは言いがたい。「個人＝身体・自然」ではなく、「環境＝社会」でもない。個人には社会的要素があり、環境にも個人的・自然的要素は大きい。現に近年、ゲノム研究の進展に伴い、ゲノム決定論という物語が社会的に構築されている。

さらに津田氏は、障害者やその家族にとって、非障害者との境界は深く、それは「個人・医療モデル」がもたらす不都合に由来すると述べている⁽¹⁰⁾。しかし障害者が直面する不都合は、「個人モデル」がもたらす社会的抑圧だけではない。「個人・医療モデル」によって緩和される障害の不都合も、ありうる。何より、深い境界線に脅える障害者や家族は、誤った「個人・医療モデル」に囚われた客体ではない。むしろ「個人・医療」と「社会」の二者択一にとどまらない現実の「生命－生活」の疎外を熟知し、それを引き受けて生きようとするからこそ、脅えるのではない。脅えは、人間の主体性の発露である。

【ポスト・フォーディズムは脱近代か？】

津田氏は、近代主義を批判する。ただし、津田氏が批判する近代は、①前期資本主義（大量生産・大量消費の産業構造）、②国民国家、③進化論の適用である⁽¹¹⁾。したがって後期資本主義で多元的価値が承認されつつある現在は、津田氏にとって、もはや純粋な近代ではなく、脱近代、または少なくとも脱近代への移行

期になる。

しかし筆者のみるところ、前期資本主義も後期資本主義も資本主義であることに何ら変わりはない。国民国家の統一的支配、および帝国主義や「帝国」の多元的支配が併存し、資本蓄積という至上目的に沿って恣意的に使い分けられる現実も、近代の一貫した特徴である。そして何より、「前期資本主義」「後期資本主義」という呼称自体、「先進（中核）」諸国の一国単位の単線的発展史観である。筆者は、津田氏のいう「前期資本主義」は「帝国主義下でのフォーディズム」、「後期資本主義」は「『帝国』下でのポスト・フォーディズム」と定義する方が正確だと考える。「先進（中核）」諸国のポスト・フォーディズム現象（津田氏のいう「後期資本主義」）は、世界規模の「『帝国』＝ウルトラ・フォーディズム」において必要不可欠な管理中枢機能を集積した社会である。それは、かつてのフォーディズム（津田氏のいう「前期資本主義」または「近代主義」）より一層深く、人間の生活・発達を疎外している。

フォーディズムとポスト・フォーディズムの社会には、それぞれ固有の「個人と関係」、「分析と物語」、「量と質」、「客観と主観」、「本質主義と構築主義」、「能力とアイデンティティ」、そして「システムと生活世界」がある。これらを二分法的に捉え、前者を近代、後者を近代批判とみなすと、ポスト・フォーディズムの深刻な疎外から目をそらすことになりかねない。

【政治と科学／実践と研究】

津田氏がポスト・フォーディズムに期待と可能性を見出そうとするのは、おそらく現実社会では、津田氏のいう「近代」の支配が未だ根強く、「脱近代」の影響力は萌芽的のみなしているからではないだろうか。つまり「近代的発達概念」に抗して、新たに芽生えつつある脱近代的な発達概念を強化することが重要だという、一種の政治戦略である。新たなパラダイムが抱える固有の問題・限界を批判することは、結果的に、古いパラダイムに依存する勢力を利することになる。

筆者は、こうした戦略は、政治または技術であり、研究の論理ではないと考えている。実践と研究、政治と科学はつねに厳しい緊張関係を保つべきであり、決して融合・統一してはならない。現実の矛盾を古いパラダイムの残滓と捉え、今、生成しつつある新たなパラダイムによって展望が開けつつあるという発想は、それ自体が、ポスト・フォーディズム時代の市民社会が矛盾を隠蔽するための「大きな物語」であろう。

もとより教育学・法学等の学問分野では、何らかの規範から逃れられず、また現場で実用的処方箋を求められるため、筆者のような立場は成立しえないのかも知れない。もし万一そうであれば、教育学・法学はいかなる意味で科学・研究でありうるかが問われる。そのような教育学への疑問を強く感じさせたのは、山本(2001)であった。山本論文は、自身が高く評価するセンの潜在能力アプローチを批判することなく、むしろそれを自らの専門分野である教育に適用しようと試みていた。それは、教育（学）という限られた領域の中では、一定の意義がある。しかし潜在能力アプローチを超える人類の新たな知を開こうとするものではない。あらゆる理論は、批判によって乗り越えられる。優れた理論であればあ

るほど、それを批判・克服し、新たな知を生み出すことが、科学・研究の固有の使命ではないか。研究において、批判は尊敬の証である。

それとも関わり、津田氏、また前掲の森岡氏の議論には、社会構築主義との親和性が強く感じられる。社会構築主義は1970年代以降、重要な知見をもたらした。しかしすでに半世紀近くが経過し、人文・社会科学の多くの領域では、社会構築主義への批判、特に自然本質主義との二者択一の認知枠への批判が活性化しつつある。それは自然本質主義への単なる「復古」ではない。現在、人類が切実に求めている未知の知は、「自然と社会／本質と構築」の統合的理解（自然構築・社会本質を含む文理融合）の方法論であろう。

【能力原理と必要原理】

さて渡部(2013)は、「能力原理から必要原理への転換」の重要性を説く⁽¹²⁾。

筆者も、「能力」は「国籍（国民主権）」と並び、近代的疎外・排除を正統化する最終的根拠だと考えている。また「必要」は、諸個人の「生命－生活」の発展的再生産において最も重要な概念である。能力と必要は、まさに現局面の人間発達を論じるキーワードだ。

しかし筆者は、能力だけでなく必要もまた、疎外とその克服の過程にあると考えている。その意味で、「能力→必要」という二者択一を前提としたシフトは、やはり現実を捉える認知枠として不十分ではなからうか。能力だけでなく、必要もまた疎外されている。必要だけでなく、能力もまた疎外の契機となりうる。たとえば筆者は、中国残留日本人孤児を育てた養父母の「能力」を論じたことがある。彼・彼女達の行為は、死に直面した孤児の生命を救うという「必要」に基づくとともに、それを実践する「能力」によっても支えられていた⁽¹³⁾。

また渡部氏は、能力原理の克服において必要な社会の変化が、「修正主義・改良主義か、パラダイム転換かは見極められない」としつつ、「一律の硬直した制度・措置から、個々のニーズに柔軟に対応する行政・サービスに移り変わりつつあることは確か」とも指摘する⁽¹⁴⁾。

筆者には、こうした歴史社会認識もまた、前掲の津田氏と同様、ポスト・フォーディズム社会の賛美に傾斜しているように感じられる。

V. 自然・社会・文化と人間発達

さて次に、遠藤(2012)・氏家(2012)を検討する。これらはいずれも、『発達科学ハンドブック 第5巻 社会・文化に生きる人間』に収録された論文である。

【「生まれと育ち」、「遺伝と環境」、「生物と社会文化」】

遠藤氏は、「生まれと育ち」、「遺伝と環境（経験）」、「生物と社会文化」をそれぞれ二分法的ではなく、相互浸透・融合の視点から捉える。これはいうまでもなく、自然本質主義と社会構築主義の二分法、とりわけ社会構築主義に立つ古典的ジェンダー論等への批判として、重要である。

ただし筆者には、3つの疑問がある。

まず第1に、「生まれ」と「遺伝」と「生物」はそれぞれ全く異質な概念である。同じように「育ち」と「環境（経験）」と「社会文化」もまた、全く異質な概念である。しかし遠藤論文では、その区別が明確ではないように思われる。つまり本論文では、「生まれ＝遺伝＝生物」、「育ち＝環境＝社会文化」であるかのように論じられている。実際には、「生まれ」つまり生得的属性には当然、出身家庭の経済状況や国籍など社会文化的要素・環境が含まれる。「生物」としての人間には当然、体内・体外環境、および「育ち」の過程が不可欠である。「社会文化」は当然、遺伝・生物・「生まれ」にも介入する。

第2に、遠藤論文は、「生まれと育ち」、「遺伝と環境」、「生物と社会文化」を融合的・統一的に把握しているが、しかし宿命論を免れていないのではない。「生まれ」・「遺伝」・「生物」だけが人間にとって宿命であるわけではない。「育ち」・「環境」・「社会文化」もまた十分に宿命たりうる。発達科学において重要なことは、「生まれと育ち」、「遺伝と環境」、「生物と社会文化」のすべてを規定し返し、新たな質に変革していく人間の主体論・実践論に踏み込むことではなからうか。

そして第3は、歴史社会認識への疑問である。遠藤論文には、「ナチスによる優生思想」⁽¹⁵⁾ といった記述があるが、これは事実誤認であろう。優生思想とその実践はナチズムの特殊性ではない。むしろアメリカ・北欧福祉国家・現代日本を含め、近代（とりわけポスト・フォーディズム社会）に普遍的に広がっている。近代社会そのものに対する批判的視点が、遠藤論文にはやや希薄といわざるを得ない。

【人間発達と社会文化・コミュニティ】

氏家（2012）は、子供が「コミュニティの一員として行動する際の規範とそれへの感受性、ある種の従順性を身につける」過程を重視する⁽¹⁶⁾。そしてロゴフを援用し、「発達とは、コミュニティの社会的文化的活動への参加のあり方の変容の過程である」と述べる⁽¹⁷⁾。また、子供がコミュニティの新参者であることをふまえた正統的周辺参加に言及し、さらにコミュニティの文化をローカルなダイナミクスにおいて捉える。

本論文は、個人の発達を一定の社会文化的基盤の中で捉える上で重要な知見を提示している。

しかし、疑問もある。

まず第1に、氏家論文の視点では、コミュニティ規範への従順性を身につける発達は捉えられても、既存のコミュニティを根底的・歴史的に変革する発達は視野の外におかれる。コミュニティによる諸個人の統合的な社会化が重視され、逆にコミュニティそれ自体が疎外・矛盾として諸個人によって克服される側面はあまり論じられない。したがってコミュニティのダイナミクスも、かなり限定的である。

そこで第2に、多様な社会文化の例示やその意味づけも、やや一面的で、しかも時空を超えたものとなっている。氏家論文には、①ボリス的動物（アリストテレス）、②昔の（おそらく日本の）子育てをめぐる多くの慣習、③現代の子育ての社会文化、④ビジョン語・クレオール語の創造等、多様なコミュニティが、しかしい

ずれも人間発達・社会化の基盤としてあげられる。しかしボリスの滅亡、昔の子育てをめぐる慣習の消滅、そして現代日本のコミュニティにおける疎外とその止揚の模索やそれらを支えた人間発達は十分に論じられていない。

そして第3に、コミュニティの「中心-周辺」の把握にも疑問がある。氏家論文は、一方で子供は新参・周辺であることから正統的周辺参加の重要性を論じ、他方でクレオールのように子供が新たな文化を創出する事象にも言及している。しかし実際には、子供・移民等は新参・周辺だからこそ、既存の社会文化・コミュニティを変革する主体になりやすい。また子供・若者など後継世代は、累重的な生産力発展の担い手だからこそ、伝統的な社会文化を変革する主体になりやすいのではない。さらにビジョン語・クレオール語の創造は、植民地支配・奴隷貿易によるアフリカの既存コミュニティの破壊、およびその渦中で新たなコミュニティ創成に向けた必死の挑戦であり、複数世代にわたる歴史的な主体形成であろう。それは決して、子供文化が「大人たちの文化にも大きな影響力をもつ」⁽¹⁸⁾ といった認知枠で捉えきれものではない。

VI. 社会変革と人間発達

さて次に、二宮（2000）・同（2008）、および太田（2003）を検討する。二宮（2008）は、発達科学部の学部共通科目「発達科学への招待」の教科書、同（2000）は発達科学部主催の国際シンポジウムにおける報告論文であり、いずれも発達科学の発展を明確に意識したものである。

【人間発達の経済学】

二宮氏は、「労働（目的意識性・因果関係の認識）」と「言語（コミュニケーション）」の二者択一に陥らず、それらの相互関係および統合の中で、人間発達を捉えている。また宿命論に陥らず、人間の能力・主体形成を正面から論じている。

しかし、いくつかの疑問がある。

まず第1に、二宮氏は、人間の「人格」を、①「社会関係の総体」（つまり各自固有の社会的独立性）、および②潜在能力を顕在化する意欲・意思・指向性・意識性（つまり諸能力を発揮する主体性）という、2つの要素の統合として捉える⁽¹⁹⁾。しかし筆者には、「社会関係の総体」がなぜ、共同性・依存性ではなく、独立性になるのか疑問である。二宮氏の認知枠から析出されるのは、近代的・自律的な個人であり、極めて「強い」人格にほかならない。また、②が付加されることで、ますます自覚的・意識的な「強い」個人が析出される。人間がそうした「強い」個人になれない場合、もはや「社会関係の総体」によって翻弄され、潜在能力を発揮できない客体となるしかない。筆者は、人間はまず何よりも「現実の生活過程」であり、それを実現する必要に応じて「社会関係の総体」になると考えている。人間は、ただ生きていてだけで十分に主体的・創造的である。今、求められているのは、一部の「強い」主体による啓蒙・救済・支援ではない。当たり前前に生きている人々の生活過程を形成している主体性・創造性とその発達による、意図せざる要素をも視野に入れた社会形成・社会変動の把握であろう。

第2に、二宮氏は、コミュニケーション的理性の意義を極めて高く評価する⁽²⁰⁾。コミュニケーション的理性は、各種の合理性(科学的真理性・規範的妥当性・主観的誠実さ)を識別し、また識別しうるがゆえにそれらを通底・包括する。これは、ハーバーマスを援用しつつ、しかしそこにとどまらない二宮氏のオリジナルな知見である。しかし筆者は、これにもやや異論がある。ハーバーマスが重視したコミュニケーション的理性は、合理的判断能力一般ではなく、あくまで相互理解・合意に必要な理性にすぎない。そして筆者は、近代を生きる人間には、決して相互に理解・合意せず、また了解・合意してはならない合理的判断があると考えている。また筆者には、二宮氏のいう合理性の3区分それぞれ自体が、近代主義であるように思われる。もし二宮説が正しければ、科学性(自然科学)、社会性(社会科学)、人間性(人文学または人文科学)は相互の識別・不可侵的理解(差異を認め合った共生的理解)こそが重要であり、融合・統合は誤りということになる。しかし筆者は、二宮氏が指摘するようにそれらを通底・包括する人間(二宮氏はそれを「コミュニケーション的理性」と呼ぶが、筆者は「生命-生活」と考える)それ自体を解明する統一的・融合的な理論が必要だと考える。

第3に、二宮氏は、自ら援用するハーバーマスと同様、周辺諸国も視野に入れた世界大の生産様式・階級構造とその変革という視野が、やや希薄であるように思われる。ハーバーマスの理論は、「先進」諸国内部の民主主義的社会変革を可能と想定し、またはその範囲で可能な民主主義的変革に視野を限定している。たしかに二宮氏は、ハーバーマスを超えて「コミュニケーション労働」論へと思考を深める。しかし筆者の考えでは、労働と言語の結合は、いわゆる「コミュニケーション労働」・対人サービス労働に限定されず、あらゆる労働に普遍的である。そうした中であえて「コミュニケーション労働」に焦点を当てれば当てるほど、それが主要な位置を占めるポスト・フォーディズム社会に視野を閉ざす一国単位の近代化論に陥りかねない。

なお第1で述べた、人間を「社会関係の総体」と捉えるか、「現実の生活過程」と捉えるかという論点は、いうまでもなく初期マルクスの理解に関わる。第3で述べた生産様式・階級構造論は、中期・後期のマルクスの理解と直結している⁽²¹⁾。筆者のマルクス理解にとって、二宮氏はまさに志を同じくする「最強の論敵」であり、筆者は氏との論争を通して自らの認識を深められたことに深く感謝している。

【潜在能力アプローチの限界を超えて】

さて太田(2003)は、国連開発計画の「人間開発(Human Development)」戦略に基づく開発の無力さを、単なる運用・実行上の問題ではなく、その理論的基礎であるセンの潜在能力論の限界・問題にまで溯って検証している。すなわちまず潜在能力論には、①いかなる潜在能力を追求すべきか明確な指針がない。またそれは、②個人に視点を当て、社会構造論・改変論の視野を欠落させている。それゆえ、容易に近代主義に取り込まれ、また社会的矛盾の改善は求めても、その原因分析に立ち入らないのである。

この太田氏の主張に、筆者は賛成である。

ただし、この太田論文において、①と②に対する自身の回答は必ずしも明示されていないように思われる。

筆者の暫定的回答は、すでに述べた通りである。すなわち、①追求すべき潜在能力は、現代的な疎外を克服する能力である。ただし潜在能力論には、疎外を生み出すのもまた人間であるという点が看過されている。つまり潜在能力論は、疎外論のごく一部しか射程に入れていない。また、②社会構造論・改変論については、近代の止揚に焦点が当てられるべきである。一人一人の人間が、自らと次世代の「生命-生活」を発展的に再生産させる営みを通して、意識するかしないかに関わらず、近代社会(資本蓄積を至上目的とし、資本主義・国民国家・市民社会を不可欠の構成要素とする世界規模の社会)をいかに止揚しつつあるのか。それを規範論ではなく、実態認識として解明することが重要である。

VII. 人間発達環境学研究科・発達科学部への提言

最後に、蛭名(2000)を検討する。この論文は、前掲の二宮(2000)と同様、発達科学部主催の国際シンポジウムにおける報告論文であり、6つの提言を行っている。各提言に対する筆者なりの意見を述べたい。

【提言①大学はアカデミズムの拠点である】

筆者も賛成である。ただし、それゆえ筆者は、社会連携・社会貢献等、アカデミズム以外の論理への安易な迎合には慎重であるべきだと考えている。また筆者は、アカデミズム自体が近代の歴史的制約を伴った疎外の一形態であることを自覚すべきだと考えている。もちろんアカデミズムの疎外は、他の諸分野の近代社会(資本主義・国民国家・市民社会)への融合・迎合によっては解消されない。

【提言②諸学の統合への情熱を若いうちから】

この点も賛成である。またそれは、既存の近代諸科学を前提とした「学際」研究ではなく、蛭名氏自身もいうように「統合」でなければならない。既存の近代的ディシプリンへの批判なしに、「統合」は成立しない。

【提言③重要な鍵となる基本概念を種類の側面から眺めること、

④世界の階層性と歴史性を認識すること】

この2つの提言にも、筆者は賛成である。それらはいずれも、唯物論的弁証法における自明の方法だ。ただし唯物論的弁証法は、それをさらに先に進め、①歴史的な階層性や種類の側面(多様性)はそれ自体、人間の主体的認識でもあること、つまり客観は単なる実在ではなく、人間による主体的認識でもあること(したがって、人類の次の生物にどんな情報を残すのが有効かは、人類にはわからないということ)、したがってまた、②その営みは「眺め」たり「認識」するだけにとどまらず、歴史的階層性や種類の側面それぞれ自体の主体的変革・創造に至らざるを得ないことまで、視野に収めている。発達科学・人間発達環境学は、こうしたレベルにまで踏み込む必要がある。

【提言⑤同じ場所にいる利点を生かそう】

これも、筆者は反対ではない。同じ場所にいる利点を生かし、議論を活性化させることは重要だ。ただし他方で筆者は、「サロンで文化は生まれぬ」とも考えている。蛭名氏は論文中の「世界の階層構造や発展」・「人間と環境」の模式図⁽²²⁾でいずれも「個人」を重要な環と位置づけている。筆者も、近代において、それは妥当な判断だと考える。そしてそうだとすれば、まず学部・研究科のメンバー個々人が、発達科学・人間発達環境学を自ら構築する覚悟をもち、一定の業績を創出し、それらを持ち寄ることで初めて意義ある交流ができる。覚悟と業績をもたない個人が交流しても、せいぜい単なる「学際」にとどまり、時間の浪費になりかねない。つまり蛭名氏の提言「①大学はアカデミズムの拠点である」に反しかねない。そしてこうした個人の覚悟や業績を求める個人主義的業績主義こそが、近代的疎外としてのアカデミズムなのである。

【⑥歴史の中での役割と人々のライフ・コースの絡み合い】

これも、筆者は賛成である。ただしそうだからこそ、歴史認識をめぐる議論が決定的に重要である。近代、ポスト・フォーディズム、ポスト・コロニアリズム、脱産業社会、ウルトラ・フォーディズム、帝国、グローバリゼーション、そして脱近代。現代をいかに規定するかによって、「歴史の中での役割」は大きく変わる。歴史規定をあいまいにしたままの「歴史の中での役割」は、空疎である。なお筆者の歴史認識は、すでに述べた通りである。

追記

以上、発達科学・人間発達環境学の発展にとって重要な知見を提起している諸文献を検討してきた。検討対象とさせていただいた論文の著者各位には、心より感謝を表するとともに、論点を鮮明にしようとするあまり犯したであろう数々の失礼を改めてお詫び申し上げます。

本稿が、発達科学・人間発達環境学をめぐる議論の一契機となれば幸いである。厳しい御批判を賜りたい。

補注

- (1) 浅野慎一 (2005a)・(2005b)・(2005c)。
- (2) 森岡 (2013) 8 頁。
- (3) 森岡 (2013) 8 頁。
- (4) 森岡 (2013) 11 頁。
- (5) 森岡 (2013) 9 頁。
- (6) 森岡 (2013) 8 頁。
- (7) 津田 (2012a) 32～33・36 頁。
- (8) 津田 (2012b) 91 頁。
- (9) 津田 (2012a) 32 頁。
- (10) 津田 (2012a) 31 頁。
- (11) 津田 (2012b) 55～57 頁。
- (12) 渡部 (2013) 20 頁。
- (13) 浅野 (2006b)。
- (14) 渡部 (2013) 21 頁。
- (15) 遠藤 (2012) 25 頁。

- (16) 氏家 (2012) 16 頁。
- (17) 氏家 (2012) 17 頁。
- (18) 氏家 (2012) 21 頁。
- (19) 二宮 (2008) 88～89 頁。
- (20) 二宮 (2000) 194～196 頁、同 (2008) 90～91 頁。
- (21) 浅野 (2009) 参照。
- (22) 蛭名 (2000) 123 頁。

引用・参考文献

- 浅野慎一 (1998)「社会環境と人間発達」社会環境論研究会編『社会環境と人間発達』大学教育出版
- 浅野慎一 (2005a)「科学の細分化と人間発達の課題」浅野慎一『人間的自然と社会環境』大学教育出版
- 浅野慎一 (2005b)「人間発達のディシプリン」同上
- 浅野慎一 (2005c)「人間発達の時空」同上
- 浅野慎一 (2006a)「『疎外された労働』とヒトの発達・進化」中川勝雄・藤井史朗編著『労働世界への社会学的接近』学文社
- 浅野慎一 (2006b)「残留孤児の養父母になる『能力』」『図書』685号 岩波書店
- 浅野慎一 (2009)「現代マルクス主義の方法と産業・労働社会学」浅野慎一編著『現代社会論への社会学的接近』学文社
- 氏家達夫 (2012)「発達を支える社会文化的基盤」氏家達夫・遠藤利彦編著『発達科学ハンドブック 第5巻 社会・文化に生きる人間』新曜社
- 蛭名邦禎 (2000)「知のネットワークのメカニズムと知のネットワークの場としての発達科学部」『神戸大学発達科学部研究紀要』第7巻第3号
- 遠藤利彦 (2012)「『ヒト』と『人』:生物学的発達論と社会文化的発達論の間」氏家達夫・遠藤利彦編著『発達科学ハンドブック 第5巻 社会・文化に生きる人間』新曜社
- 太田和宏 (2003)「グローバリゼーション下における人間開発戦略」『人間科学研究』11巻1号
- 津田英二 (2012a)「発達と社会変革への問い」津田英二『物語としての発達/文化を介した教育』生活書院
- 津田英二 (2012b)「発達とは何か」同上
- 二宮厚美 (2008)「人間発達の概念を考える」神戸大学発達科学部『発達科学への招待』運営委員会編『発達科学への招待』かもがわ出版
- 二宮厚美 (2000)「人間発達とコミュニケーション」『神戸大学発達科学部研究紀要』第7巻第3号
- 森岡正芳 (2013)「現場から理論をどう立ち上げるかー臨床ナラティブアプローチを手がかりに」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第6巻第3号 (特別号)
- 山本敏郎 (2001)「人間発達論の射程」『金沢大学教育学部紀要 教育科学編』50
- 渡部昭男 (2013)「人間発達環境学研究の推進と発達保障研究の深化」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第6巻第3号 (特別号)

第2章 発達科学と物語——

浅野論文：『「人間発達の学」の発展に向けた覚書』に就いて

森岡正芳

浅野（2014）の論議は極めて包括的かつ根源的な問いを投げかけている。人間発達と環境に関する新たな学問の形成について、正面から取り組まれた課題提起は心強い。浅野の「人間発達」論の枠組みにおいて、拙論（森岡 2013）をとらえなおしたとき、いくつかの論点があらためて浮かび上がってくる。浅野の覚書が示す射程は包括的なもので、筆者にはそれに応えうる準備ができていないものが大半を占める。さしあたって論点を二点選びたい。一つは、因果性認識について物語的視点の限界に関するものであり、もう一つが認識の主体形成に関わる課題である。ともに人間科学の実践領域において避けることのできない重要な問題提起をいただいた。その大部分は今後の共同課題となろうが、以下わずかばかりのメモ書きであるが、ひとまずの応答とさせていただきます。

I. 物語は科学的認識を補完する

拙論は、科学か物語かという二項対立を問題としているのではない。科学と物語を対比し、物語の思考モードを明確にすることによって、科学的認識を生活世界において基礎づけることが目されている。ナラティブ・物語の視点は、仮説検証にもとづく科学的認識、根拠づけとは異なるもう一つの思考モードである。事象の理解可能性を広げ、実践知を磨き上げることに寄与する視点である。物語は科学的認識を補完するものである。このような思考モードをあえて主張するようになった背景に、人間科学の対象が多様化し、科学的根拠も実践現場の要請に即した提示の仕方が工夫されるようになったからであろう。

ブルナー（Bruner1986）は、物語を科学的実証モードと対比する形で、人間科学のもう一つの思考モードとして立てようとした。物語の思考モードが提唱されるべき背景事情はいくつかある。心理学領域に限っても、個人の体験へと接近する必要性はくりかえし問題とされてきた。

オールポート（Allport,G.W.）は、次のように述べる。「今日われわれを窒息させるほど何千もある因子分析の研究のうち、一人の人間を特徴づける内的で独自の体制的な構成単位を発見する方法で行なわれているものがほとんどないという事実は、私にとって驚くほど奇妙に思われる」（Allport1961）。このようにオールポートは、心理学が科学としての整合性を求めるがあまり、学問研究は閉塞的になり、個性に迫りえないものになっていることを、はるか50年以上前に指摘している。

一人の人間を特徴づける内的で独自の体制的な構成単位に迫りうる方法として、オールポートは、形態生成的（morphogenetic）な視点の導入を試みた。伝記手記や日記手紙などの個人記録（personal document）を積極的に用いることで、個人に固有の体験世界を再構成するという道を探っていたようだが、構想段階のままにおかれたようである。

II. 因果性認識について

臨床という場では、科学的因果論が決定論につながることへの警戒がある。「因果的決定論の弱点は、決定論が時間軸を前向きにしが進めず、後ろ向きには戻れない」（Weizsäcker2005/1956）。このようにヴァイツゼッカーが述べるように、医療実践では、疾患の原因を外部要因あるいは個人内要因に転嫁する視点が優位になりがちである。

森岡（2013）の試論は、心理学を基本におく人間科学の実践領域をイメージしたものである。

人の生活に生じる事象について、因果関係を解明することによってその成立を分析し、対策に役立てるという立場がまずある。たとえば病気、障害など危機に関わる事象について、危機管理という視点から、危機の要因をマクロな母集団から抽出し、分析し、コントロールに役立てることは、安全管理こそが社会的に最優先課題である現代においてますます重要になる。ガイドラインや基準を示し、それを生活者が共有できるものとするために因果関係の視点による資料の分析は欠かせない。

一方で、このような視点からは抜け落ちてしまう事象が人の生活に含まれる。個人、当事者の視点からすると、危機的事象は、客観化された評価の序列とは異なる意味を持つ。人間科学は意味の理解を欠かすことはできない。意味は個人の現実を構成する。危機を被った状況を自分なりに意味づけ、納得する。その資料として、ガイドラインを構成する客観的事実の一つ一つも、個人の中では、固有の体験として意味をもつ。

狭義の科学的認識は要因の統制が可能な実験状況で、要因の連関を把握する検証にもとづくものである。要因間の因果関係が導き出されるのは、実験という枠組みにおける限定的な状況においてである。

病は生活と生命に根源的に付きまとう事態である。人の生活と生命に関わる出来事について、ある出来事がそれに先立つ出来事から因果的に導き出されるという主張は限界がある。対人支援の現場は錯綜した複数の文脈が交差する。たとえば、医療の場の特徴をあげると、医療実践で何が起るかは、完全には予測できない。その結果は一つの要因だけで決まるのではなく、複数の要因が関与する（齋藤 2013）。諸要因の関与の仕方は随伴的（contingent）であるが、一定の幅での見通しを立てることはできる。臨床の場では、原因の解明だけでなく、むしろこれからどうなるのかに、生活者は関心を持つ。病を抱える生活の見通しを立てる枠組みこそストーリーである。現場では複数のストーリーが並立するのがふつうである。特定の原因から結果が直線的に決定されることはない。行動の意味は文脈依存的であり、そこに関わる人のとらえによって意味は動く。未決定性をはらみ、意味は固定しない。一つの行動は因果的に決定されるというより、行動が次の行動を生んでいく。人の行動は派生的で創意的（inventive）である。

因果関係は言葉や記号に媒介される。生活の場では因果関係の認識も、筋立てられる。原因と結果をつなぐ意味づけ、理由づけこそ、現場での事象を説明する有力なモデルになる。原因は出来事に関わる次元では、行動の弁明すなわち理由づけにつながる。自己と他者の行為に関する意味づけ、理由づけの作業は、ナラティ

の中心領域となる。ストーリーによって人の行動の理解可能性を広げる。現場での実践の根拠づけに関しては、ストーリーによる納得、説得力が一定程度の比重を占めることは避けられない。

Ⅲ. 事象の理解可能性を広げる

物語思考モードの特性からすると、とくに納得、説得力、すなわち説明の理解可能性が問われる場面において、ナラティブが有用である。医療や福祉実践はそのような場面の典型であろう。なぜならば、不確定で偶発的な要因が関与する複雑な場であるだけに、明確な説明モデルが成り立ちにくいからである。ナラティブは、相互に矛盾するような多様な要因を包含し、現場に生じる事象の理解可能性を広げ提示できる有力な形式である。

臨床の場では、援助者と当事者の関係性要因を中心とする非特異的要因(nonspecific factors)を含む記述形式を探る必要がある。体験の現実を記述する「良いストーリー」(good story)を描くことがナラティブアプローチの方法的基盤である。物語は理解可能性を与える。生(なま)の事実を個人がどのように体験したか、それをどのように意味づけ、理由づけたかを十分に描くこと。ストーリー記述には主体の内省が働いていて、その中に個人の固有の現実すなわち人称的現実が構成される。

ナラティブが事象の理解可能性に役立つのは、筋立て(emplotment)という働きからくる。ナラティブは「筋plotを通じて複数の出来事がつなげられ、ひとつのまとまりをもって区切られる言語形式」である。筋立てというと、出来事が直線的につなげられ綴られるという印象であるが、個人の体験は、物語ることで物語の中の時間的連続の次元として結晶化し、しかもそれを全体的布置(configuration)に構成することによって、理解可能なものとなる。筋:プロットは、個々の出来事が時間的な継起に沿ってエピソードとして展開する次元と、まとまった意味を持つものとして理解できるように構成する次元の二つの働きを持つ。エピソード的な時間的連続性、時系列的な次元だけでなく、全体的布置、非時系列的次元の働きを重ねることによって事象の理解可能性を生み出す。

Ⅳ. 過程存在としての主体と認識

関係性要因を中心とする非特異的要因は、心理臨床とくに心理療法の場ではけっして周縁的で付随的なものにおさまらない。というのは、心理臨床における理解とは「関係の中での暗黙知」(implicit relational knowing)を基盤とするからである。言葉というより身体で知っていることが、現場のプロセスを促進する。言葉の底にある身体ベースの出来事、変化が対人援助における支援の手がかりになる。浅野(2014)が「支援者との関係性に視野を限定せず、対象者のトータルな生命—生活過程の把握こそが重要ではないだろうか」という指摘は当を得ている。これからの対人援助の方向性を示すものである。対人援助場面を動かす非特異的要因は関係性要因のみに帰するものではない。しかし臨床心理学の現在においても、いまだ関係性要因が解明されたいは言い難く、臨床知の創造において優先されるべき課題の一つである。

カウンセリングなどの関係性を基本とする心理的ケアの場合、仮定的に見通しをもちながら徐々に方向性が見えてくるという実

践プロセスが特徴的である。現場の関係の中でクライアントと相談しながら方向を軌道修正し進めていく。プロセスの中では、予期せぬ認識や考えが突然生じるということもある。体験はつねに不確定な要素を含む。それが言葉にされると、断片的で矛盾するような言説になることはまれではない。関係が規定する文脈によって、体験の言語素材の価値づけ、意味づけが違ってくる。ある言動の意味や心的機能の把握について、複数の文脈で読むことが欠かせない。さらにどの文脈のなかで読むべきか究極的には確定できない。このような世界である。

このような関係性の特徴から立ち上がってくる主体は、浅野(2014)の重視する主体的認識の形成とは次元を異にするものかもしれない。主体的認識をそれが成り立つ対象との関係場のなかで、とらえることは共通の課題である。そこに歴史や制度、権力関係がどのように絡むかが、浅野の論点であろう。主体的な認識のあり方について、浅野の場合、社会文化、歴史、環境をふまえての主体的な科学的認識の成立に重点が置かれている。そこで課題となる主体とは、どのような在り方をいうのだろうか。主体は抽象的な存在ではない。つねに何らかの現場、生活の場の中で他者と関わる基点として具体化しているはずだ。そして実践という場はつねにローカルで限定的な領域であり、主体的認識も具体的な場において成り立つはずだ。心理臨床や対人援助の場におおしてこの点について議論を重ねていくことが、人間の発達とそれを支える環境の学を形成する原動力となろう。

Ⅴ. 今後の課題

ここで浅野らとの議論をふまえて、私たちが人間発達環境学の展開を進めていく一つの課題を提示しておきたい。体験の意味が生成変化すること、すなわち体験のプロセス性に接近することを前提にした学問の探求である。個人の発達と学びあるいは心身のケアの価値や意味は環境によって動くということを多視点的に把握し、意味生成の運動を規定する環境をどのように精査し、発達、学びとケアに資するものとして活かすかについて協働することである。環境は個人が生きている生活共同体、社会制度、経済活動、歴史文化、自然を含むトータルなものであり、個人の生の意味は環境が作り出す異種交差的な文脈の中で規定される。主体形成の道筋は、このような環境の文脈から切り離しては描けないと思われる。

体験を物語ることに意味を持つのは、人が生成変化する過程存在であることに人間科学の起点をおくかどうかに関わる。志向性をもって生きる行動主体が、自己や他者、世界をどのように意味づけていくか。人々との交わりの中で、「生命—生活過程」をどのように展開し、それを意味づけていくかが課題であり、ナラティブアプローチはこの課題を共にする場面においてこそ活かせるものである。

引用文献

- Allport, G.W. (1961). *Pattern and growth in personality*. New York: Holt, Rinehart, & Winston
- 浅野慎一(2014). 「人間発達の学」の発展に向けた覚書. 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』 7-2

- Bruner, J.S. (1986). *Actual minds, Possible Worlds*. Cambridge: Harvard University Press
- ブルーナー『可能世界の心理』田中一彦(訳)(1998). 東京:みすず書房
- 森岡正芳(2013). 現場から理論をどう立ち上げるか - 臨床ナラティブアプローチを手がかりに. 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』6-3(特別号). 7-12
- 斎藤清二(2013). 『事例研究というパラダイム—臨床心理学と医学をむすぶ』東京:岩崎学術出版社
- Weizsäcker, V.v. (2005/1956). *Pathosophie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp. ヴァイツゼカー『パトゾフィー』木村敏(訳)(2010). 東京:みすず書房

第3章 浅野論文へのリプライ

津田英二

I. はじめに

「人間発達の学」を発展させようとする浅野氏の意気込みに対して、まずは敬意を表するとともに、拙著をその踏み台として取り上げられたことに感謝を申し上げる。私自身も、「人間発達の学」といえば教育学や心理学とされる現在の枠組みを超える必要を感じており、その点で浅野氏に近い問題意識を持っているのではないかと思う。

しかしながら、本論における拙著への言及については、しっかりと反論すべき点があくつかあり、浅野氏からの依頼もあってリプライを書くこととした。このリプライを通してより論点が明確になり、「人間発達の学」に近づくことを期待したい。

その前に、筆者の立場のようなことを述べておきたい。浅野氏と同じ人間発達環境学研究科に属し、人間発達という語が日々の仕事や生活に欠かせない状況に身を置いている。出自は教育学、しかも社会教育論であり、その中でも障害をめぐる実践的研究に足場を置いている。つまり筆者の研究関心は、健常児の学校教育をモデルとする教育学の中心からは最も離れた周辺部分にある。さらに障害をめぐる社会教育を捉える立場に身を置いていると、社会学や心理学、社会福祉学などは教育学同様に身近な学問になってくる。特定の学問領域にはまり込むことができず、どこからも一定の距離を置いている状況下で、領域間の谷間の部分で研究をしているような気がする。

また、筆者は人間発達環境学研究科の中に置かれているヒューマン・コミュニティ創成研究センターにも所属がある。ここは実践的研究を趣旨とした研究機関であるため、筆者も実践的研究にこだわるべき立場に身を置いているといえる。しかし、筆者が実践的研究にこだわるのは、所属ゆえとばかりはいえない。筆者が学生時代に書いた修士論文のテーマは「社会教育実践分析論」であった。学習者がいて、実践者がいて、研究者がいるということが当たり前ようになっていた社会教育論の構図に違和感を持っていたところが発点にあった。その構図は研究者が実践者の目を通して人々の学習を捉えるという方法を帰結しており、学習者にとっての学習のリアリティを捉え切れていないように感じた。そこで筆者は、アクションリサーチや参加型研究といった

研究のあり方を社会教育のフィールドで応用するという点について修士論文で検討した。参加型研究については、筆者の社会教育学会デビュー論文でもあった(津田英二「日常生活と社会教育研究—参与研究の理論化過程の検討—」『日本社会教育学会紀要』No.30, 1994年6月, pp.96-105)。学習者にとっての学習のリアリティを捉えるということについては、修士論文以降すでに20年程が経つが、いまだに道遠しと感じている。この研究紀要の別稿にそのことの一部を示す論文を発表している(津田英二「民間学童保育所における子どもとおとなの学び」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』5(2), 2013年3月)。一目で実践的研究が道半ばであることを理解してもらえと思う。そういったわけで、実践的研究についての筆者のこだわりは根深い。

II. 基底体制還元主義?!

筆者が大学院生だったころ、「基底体制還元主義」などという大仰な用語に出くわした。丸山真男による語だというのが、筆者が出会ったのは社会教育の実践と研究との関係をめぐる論争においてであった。鈴木敏正と山田正行の論争であり、筆者はここから多くを学んだ。浅野氏の主張を読んでいると、鈴木-山田論争を思い起こしてしまう。

鈴木敏正は1990年代を代表する社会教育論の論客であり、主体形成の過程を社会教育論の骨格として提示しようとした。特に主著『自己教育の論理』(筑波書房、1992年)で、自己実現→相互承認→主体形成、あるいは自己疎外↔自己教育↔主体形成、あるいは無意識・虚偽意識→意識(感性→悟性)→自己意識→理性→主体といった図式で、主体形成の過程の全容を説明しようとしている。骨太の枠組みで、すべての社会教育実践がこの枠組みで説明できてしまうような迫力をもつ理論であった。

しかし、山田正行はこうした鈴木氏の立論に対して「基底体制還元主義」だとかみついたのである。山田は次のように述べている。“彼の分析論の構図においては、あくまでも自らの理論的枠組みの妥当性を論証する題材として実践が位置づけられているのであり、けっしてその逆ではないということである。逆にいえば、そのことは、結果的にその分析枠組みにおさまらない実践の局面は分析の対象とならないということでもある。”(社会教育基礎理論研究会『叢書生涯学習Ⅳ 社会教育実践の現在(2)』雄松堂、1992年, p.129)

鈴木氏が全体を説明する完璧な理論をつくらうとすればするほど、現象は理論に従属するかのように位置づけられてしまう。この論点をさらに明確にした末本誠は、次のように述べている。“鈴木氏自身は明示していないが、こうした主体形成の過程を媒介するのは、社会科学の知識と理解して良いだろう。……鈴木氏のように主体形成の過程を社会科学に主導的な役割を託すという形でのみ、想定し実践することには疑問を感じる。例えば、日常生活での経験によって獲得されるいわゆる知恵や、伝承の世界の意味、そしてとりわけ芸術のもつ意味などは、社会科学に比して一段劣るとすべきなのだろうか。”(末本誠「社会教育概念理解(把握)の方法をめぐって」について」『日本社会教育学会紀要』No.29, 1993年, p.9)

こうした議論を傍観しながら、大学院生の私は次のような山田の決意表明に胸を打たれたものである。“分析する側の人間が何らかの分析枠組みを設定する必要がないということを意味するものではない。そうした分析の枠組みが現実の実践の展開のダイナミズムとのかかわりの中で、常に再構成されていくような視点と方法が問われてくるということである。われわれは、実践分析という作業は分析する側と実践を展開している学習者との相互関係の中でおこなわれるべきであると考え。”（社会教育基礎理論研究会『叢書生涯学習Ⅳ 社会教育実践の現在（2）』雄松堂、1992年、p.129）

さて、浅野論文へのリプライに戻ろう。浅野氏は冒頭で、人間発達の捉え方についての枠組みを提示している。その枠組みはおおむね理解できるものであるし、おおざっぱに言えば筆者も浅野氏とパラダイムを共有していることを確認できるものである。しかしだからこそ、その枠組みを用いてあらゆる言説や現象を一刀両断していく議論の進め方に、山田正行が鈴木敏正に感じたであろう違和感と通じるものを感じる。

例えば、浅野氏は社会構築主義を批判して次のように述べている。“社会構築主義は1970年代以降、重要な知見をもたらした。しかしすでに半世紀近くが経過し、人文・社会科学の多くの領域では、社会構築主義への批判、特に自然本質主義との二者択一の認知枠への批判が活性化しつつある。それは自然本質主義への単なる「復古」ではない。現在、人類が切実に求めている未知の知は、「自然と社会／本質と構築」の統合的理解（自然構築、社会本質を含む、文理融合）の方法論であろう。”筆者も、大局的にみて浅野氏は正しいことを言っていると思う。しかし、その正しさは、社会構築主義に依拠した試みを過去の誤謬と判断することにつながるのだろうか。社会構築主義に無批判に依拠することに対しては批判すべきだと思うが、社会構築主義との親和性があるからといって、だからだめなのだという批判は早計ではないだろうか。

浅野氏の言う通り、筆者は社会構築主義的な見方によって実践的研究を行っている。“分析の枠組みが現実の実践の展開のダイナミズムとのかかわりの中で、常に再構成されていくような視点と方法”（山田）を追えば、社会構築主義的な視点と方法に近くなる。しかし、だからといって社会構築主義ですべてを説明できるわけではないとも思っている。そもそも純粋な社会構築主義などありえないのではないかと思う。

例えば「障害は社会によって構築される」という命題を掲げたとしても、観念論に陥らない限り、障害の医学的根拠を否定することはできない。そんなことは分かりきっている中で、医学的根拠の横暴への対抗という必要から、人々の経験に重点を置いた研究が求められるようになってきたのである。そして、「障害は社会によって構築される」という命題から研究を進めれば、必然的に研究主体の認識枠組み（障害観）が問われることになる。「本質」とされてきたことに疑いが生じていくのである。そうした過程こそが、「人間発達の学」にとって重要なのだと私は思う。

こうして、「1970年代に流行った社会構築主義にまだハマっているのか？」といったような浅野氏の批判には違和感を持つのである。浅野氏が「自然と社会／本質と構築」の統合的理解を急ぐ余り、結果的に、研究知が人々の生活や人生、実践から学ぼうとす

る態度に対して、否定的なまなごしを向けることにならないことを願う。

Ⅲ. 実践と研究の間

浅野氏の立論に対する二点目の違和感は、研究と実践との関係についての捉え方にある。実践的研究を模索する筆者からすると、この論点が最も浅野氏と筆者とを隔てている壁だと感じる。

浅野氏は、研究が真を追求するものであって、善を追求するものではないと主張する。実践的研究は善を追求せざるを得ない異にはまるからやめておいたほうが良いと諫言もする。研究の理念が真を追求するものだという点に異議はない。しかしそれはアイデアの世界の話である。現実には真善美は分かちがたく結びついており、容易には切り分けられない。真を追求する立場上、善を冷徹に切り離すという態度もありえるとは思いますが、常に真の世界に侵犯してくる善と格闘しながら真とは何かを問うような態度もありえる。

学生時代、教科書検定訴訟の支援をしていたことがある。教科書検定訴訟はまさに真と善とが激しくぶつかりあうような場であった。真は信念と分かちがたく結びついており、異なる信念は異なる真を主張していた。信念は当然のことながら善に根ざしている。そういう構図の中で、信念に根ざした真を追求した果てに、善の世界での闘争を繰り広げた研究者家永三郎氏の生き様に筆者は憧れた。家永氏だけでなく、それぞれ分かちがたく結びついた真と善の中で研究者人生を歩んでいる憲法学者、教育学者に出会った。

おそらく浅野氏は、家永氏らは真を追求しているときの顔と、善を主張しているときの顔は違ったはずだと反論するかもしれない。総体としては広義の研究者かもしれないが、狭義には真を追求している彼らが研究者なのだ、と。

筆者はこの2つの顔を冷徹に使い分けることなどできるのか、ということにこそ疑問をもつべきだと考えている。つまり、真と善とは分かちがたく結びついている限り、真の変化は善の変化を伴うし、善に疑いが生じれば真にも疑いが生まれる。冷徹に真と善を分けるということは、このダイナミズムを無視することを意味する。

浅野氏は、研究者自身が科学・研究を批判的に省察していくことによって発展させる使命を負っていると述べている。そうであれば、真と善との相互性のダイナミズムから生まれる真への省察は、科学・研究の使命なのではないか。もっといえば、人間がたどりつける真の世界は常に誤謬が含まれている。還元すれば、現象の理論に対する裏切りに耳を澄ますことは、理論構築にとって重要な要素ではないかということである。

例えば、本紀要に別稿として書いた「民間学童保育所における子どもとおとなの学び」という論文は、実践現場でのできごとを記述することを通して、子ども中心主義で固められた学童保育の見方に変化をもたらそうとするものとなった。最初から子ども中心主義を批判しようとして実践的研究に取り組み始めたわけではなかった。実践現場に身を置き、さらにその経験を記述し、時間をおいてそれを読み直し、分析作業をするといった過程を経ることで、筆者自身も共有していた学童保育に対する一般的な見方を

捉え返すというテーマが浮上してきたのである。

浅野氏は次のようにも述べている。(常識的世界観を実践的に打破するには)“真・善・美を超える究極の目的——人間発達の目的——を、率直に議論することだ。”(浅野慎一『人間的自然と社会環境』大学教育出版、2005年、p.172)大いに賛同するところであるが、問題はそこに至る過程の描き方なのだろう。筆者は、それぞれ実践的に現実社会の中で右往左往、試行錯誤しながら、真善美を超えようとする営みが不可欠だと考えている。しかし、真の世界と善の世界が混在する実践的研究を批判する浅野氏からは、「そんなことは無駄だからやめておけ」と言われているような気がするのである。

IV. 障害の個人モデル／社会モデルへの誤解

最後に、障害の捉え方について、浅野論文への疑問を提示しておく。浅野氏がライフワークとして取り組んでいる中国残留孤児の問題と、筆者が取り組んでいる障害の問題とは、多くの点で共通していると思う。それだけになおさら、浅野氏の言説には看過できない部分がある。

まず、浅野氏は「個人・医療モデル」によって緩和される障害の不都合も、ありうる。」と述べている。この一文から、浅野氏が障害の個人モデルあるいは医療モデルと医療とを混同しているのではないかという疑いが生まれる。個人モデル、医療モデルは、例えば障害の医学的根拠、医学に基づく治療そのものではない。障害の社会モデルが、それらを否定しているわけでもない。そうではなく、障害者であることは悪いことであり、健常者に近づくべきであり、そのために障害者は医療に従属しなければならないとする一般的な世界観のことを、障害の個人モデル、医療モデルと言っているのである。

「個人・医療モデル」によって緩和される障害の不都合があるとするれば、そのこと自体、浅野氏の言う人間疎外の顕著な例なのではないだろうか。例えば、自分よりもっと健常者から遠い様態の障害者を横目にして「自分はまだまだ」と感じてホッとすることだとか、自らの障害を世間の目から隠すことで立派な自分を演出することだとか。浅野氏が述べている不都合の緩和とは、そういうようなことなのだが、浅野氏はそれでよいのだろうか。

次に浅野氏は、障害者や家族が障害と健常とを分かつ深い境界線に脅えるという事態について、「現実の「生命－生活」の疎外を熟知し、それを引き受けて生きようとするからこそ、脅えるのではない。脅えは、人間の主体性の発露である」と述べている。

障害者に関する研究や実践の中で、浅野氏が述べているような「引き受け」は、「障害受容」という言葉で表現されてきた。筆者は、「障害者や家族は障害を受容するものだ」とする前提に違和感を持っている。「障害受容」が現実の過程を示すだけならまだしも、現実社会では「障害者や家族は障害を受容しなければならない」という規範へと即座に変質するからである。「障害受容」できずにこしたことはない。しかし「障害受容」できない障害者や家族に対して、社会は厳しいまなざしを向けすぎではないかと思う。

「現実の「生命－生活」の疎外を熟知し、それを引き受けて生きようとする」ところに至るまでには、それなりの過程がある。筆者はその過程に着目することが大切だと思っている。あれこれ

悩み、苦しむ。障害者や家族だけの過程ではない。周囲にいるさまざまな人たちも、その過程に関与している。寄り添おうとする人もいれば、乱暴に切り捨てる人もいる。浅野氏にはそうした過程へのまなざしが欠如しているように感じる。

浅野氏は「生命－生活」とその発展的再生産過程をトータルに把握することをめざすと宣言しており、そのトータルな把握の一部に「諸個人をとりまく客観的条件の把握にとどまらず、諸個人が、それらの諸条件を自らのトータルな「生命－生活 (life)」の発展的再生産過程にいかにか主体的に位置づけているのかを把握する”ことを位置づける(浅野慎一『人間的自然と社会環境』大学教育出版、2005年、p.174-5)。しかし、まさにこの把握ひとつとっても、動態的な把握をしようとしたら、つまり過程として捉えようとしたら、どれだけ困難なことであるかということである。浅野氏は、人間は「障害受容」するものだという静的な観点で人間を把握しようとするから、容易にトータルな把握へと一足飛びできるのではないだろうか。

V. 生産的な議論に向けて

“優れた理論であればあるほど、それを批判・克服し、新たな知を生み出すことが、科学・研究の固有の使命ではないか。”とする浅野氏の研究に対する態度には、たいへん共感するところである。鋭い批判を闘わせるが、研究者間では相互に承認し、尊重し合う関係があるという麗しい研究者コミュニティに、私も憧憬する。こうして浅野論文にリプライをするというのも、麗しい研究者コミュニティに続く道を歩いていると思うがこそである。

しかし、このリプライがどのように生産的な議論に繋がっていくのかということを考えてみると、一抹の不安がある。例えば鈴木－山田論争にしても、結局違いばかりが浮き彫りにされ、傍目にはそれぞれ自分のパラダイムに固執して終わったようにみえた。それぞれが相互の立論をアンチテーゼとして弁証法的に自らの理論を展開していくという成果があれば納得できたかもしれないが、そうはならなかった。私が学んださまざまな論争の多くは、論争自体は興味深かったものの、それによって新しい理論が構築されたかという疑問に思われるものが多かった。

弁証法的に自らの理論を発展させていくことができるかどうかは、つまるところ研究者自身の学習過程に依存している。例えば、浅野氏が述べている“現在、人類が切実に求めている未知の知は、「自然と社会／本質と構築」の統合的理解(自然構築、社会本質を含む、文理融合)の方法論であろう”という筆者への批判に共感するところがあっても、だからといってすぐにそのような方法論の模索に進めるものではない。筆者自身、年齢を重ねるにしたがって思考の柔軟性も低下してきていることを自覚しているが、それは筆者の脳みそだけの問題ではなく、社会的な責任とも関連しているのだと思う。研究者はそれぞれ、柔軟になれない何かを抱えている。

にもかかわらず、弁証法的態度を許容する研究者の柔軟性は不可欠だと思う。そのためには、研究者個人が努力するだけでは足りないように思う。個人々の研鑽だけでなく、研究者の実践コミュニティを創造していく必要があるのではないだろうか。しかし、現実的なところ、現在大学が置かれている状況は、研究者の

実践コミュニティを育てないどころか、崩壊させる方向に向いている。非生産的な雑務に追われ、時間を奪われ、他者を蹴落とす競争に巻き込まれる状況は、権力者の思惑に反して、研究者の力量を弱体化させていくのではないか。「人間発達の学」を発展させるためには、まずは研究者の実践コミュニティを否定する力に抵抗しなければならないように思う。そうしたことも含めて「人間発達の学」なのだと思う。

筆者が神戸に赴任してきてすぐに、当時の発達科学部の「若手教員」の飲み会に誘われた。その席で、私の隣に座った浅野氏が「津田さんは何をしたい人なのか」と問うてきた。15年を経た今でも鮮明に覚えているほど、嬉しかった。ここの研究者集団に仲間として迎え入れられたという気がした。しかしその後、多忙化の中で、分野の異なる研究者どうして飲みに行くという文化も消えてなくなった。その果てに、孤立した研究者たちが戦々恐々として自己保身に走り、研究者それぞれが抱えている柔軟になれない何かにしがみつくようになった。もっとおおらかに自分を変えていくことをも恐れないような文化が、柔軟性を喚起する文化が、研究者集団には必要なのだと思う。